# 【最優秀賞】

| | |
|---|---|
| 団体名 | 幼小中一貫ふるさとキャリア教育「野付学」 |
| 活動の内容（概要） | 昭和 38 年から続く学校と地域との連携・協力を基盤として、地域資源や地域の基幹産業である漁業に着目し、「海と川と森はひとつ」をスローガンに掲げた自然環境保全活動や「育てる漁業」の実習等を通して、幼小中一貫のふるさとキャリア教育「野付学」を体系化して実施し、地域産業の担い手育成に取り組んでいる。 |

**受賞理由**

○　地域の基幹産業である漁業に着目し、資源管理型漁業を実践している地域として、育てる漁業を学ぶための幼小中一貫のキャリア教育として「野付学」を体系化している点がユニークである。

○　幼稚園から中学校３年生までの学びの体系が一覧できる資料の作成等、幼・小・中の学校間連携（縦の連携）に確かな系統性が確認できる点が評価できる。

○　アンケート調査などのエビデンスに基づき、効果検証と改善のための工夫を重ねていることも評価されるべきである。

○　学校が中核となって地域一丸となり行っているプロジェクトであり、それを長年積み上げてきたという点も評価に値する。

○　地域人材と学校の協働を推進する体制がしっかり構築されており、キャリア教育の次のステップとしての好事例となる。

○　地元の中学生とベトナム人研修生との交流など、グローバルな視点や事業所との連携等多様な体験機会を提供している点も評価される。

○　地域に根差した漁業を通して、大人の思いを体験する機会が与えられ、９年間大人がずっと成長を見守るというスキームが評価できる。

○　地域を作る担い手の育成だけではなく、地域で深い人間のつながりや、産業界とのつながりを実体験し、深い学びができる。

**連携・協働している機関や団体、組織**

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

野付地区幼小中合同研修会（野付幼稚園・野付小学校・野付中学校の全教職員で構成）

【行政や地域・社会、産業界等】

野付学校区学校運営協議会、野付漁業協同組合、尾岱沼商工振興会、野付ネイチャーセンター（別海町観光開発公社）、尾岱沼連合町内会、尾岱沼長寿会、別海町女性農業士会、別海町東公民館

＜幼稚園の「春の遠足」で訪れる野付漁組市場＞

## 活動開始の経緯

【活動開始時期】昭和３８年～　【継続年数】５７年

野付幼稚園・野付小学校・野付中学校では、開園・開校当初から地域の基幹産業である漁業に着目して水産学習に取り組んでおり、中学校が「育てる漁業」として野付漁業協同組合とタイアップして行う「チカ採卵実習」は三世代に渡って継続されている。平成 23 年度からは小学校が各学年の取組を「野付学」としてまとめ、平成 28 年度には中学校の「郷土学習」と幼稚園の「季節・自然あそび」を「野付学」として整理。平成 30 年度には「野付学でつなぐ郷土の夢～幼小中一貫ふるさとキャリア教育～」として体系化された。

## 「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

当地区においては、半世紀以上前より漁業協同組合等の繋がりの中で、幼稚園・小学校・中学校がそれぞれに多様な教育活動を展開してきたが、平成 28 年度のコミュニティスクール（CS）準備委員会設立を機に地域との協働と幼小中の連携がさらに深まった。30 年度には、CS 推進委員会に「野付学部会」を設置し、「地域の願い」に応える教育活動について熟議すると共に、幼小中のニーズに合った地域人材のさらなる発掘に取り組んだ。さらに野付学校区学校運営協議会が今年度正式に発足し、漁業協同組合、商工振興会、連合町内会、公民館を含む各団体の職員をメンバーに加えて「ふるさとキャリア教育部会」を設置することで、協働体制が強固なものになっている。

## 「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

昭和 38 年度より三世代に渡って野付漁業協同組合と中学校が協働している「チカ採卵実習」等、「育てる漁業」「未来へつなぐ漁業」をキーワードに軸となる実践が確立されており、当たり前のように行われている協働体制が、学校や子どもたちの変化に合わせた取組内容の柔軟な調整を可能にしている。

野付学校区学校運営協議会がＣＡＰＤサイクルのエンジンとなり、野付地区の全教職員で構成する野付地区幼小中交流研修会に機動力を与えるなど、各組織のかみ合わせにより、安定的継続が実現されている。

＜今年で 57 年目を迎えたチカの採卵実習の様子＞

## 「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

「未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む」ことが地域の願いであり、地域の基幹産業である漁業の後継者育成は最重要課題となっているが、何を、いつ、どのように行うかについて、教員が数年で異動する学校のみで計画することは困難である。そこで学校運営協議会において、水産学習を含むキャリア教育全体について熟議し、「幼小中一貫ふるさとキャリア教育プログラム」を深化させ、教育活動の一部を地域人材が主導して実施する体制を整備した。

その成果が令和元年１２月に野付中学校全校生徒を対象に実施したふるさと野付に関するアンケート（肯定：4～否定：1）の結果にも表れ、「自分たちの住んでいる地域に、誇りや愛情をもっていますか」は３．６８（元年６月：３．５０）、「地域や社会をよくするために、何をすべきか考えることがありますか」は３．０８（元年６月：２．９７、平成３１年度全国学力学習状況調査生徒質問紙同様項目全国平均：２．２９）と高くなっている。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

地域団体の各職員が野付学校区学校運営協議会のメンバーとして加わったことにより、必要な教育活動を柔軟に効果的に実施できるようになった。昨年度より、地域の水産加工会社の協力により中学生とベトナム人研修生との交流会が実現した。今年度は津波を想定した幼小中合同避難訓練に加えて、奥尻島大津波を体験した語り部を招いての講演会を学校運営協議会主催により幼小中で実施した。

さらに、職場体験の受け入れ事業所やキャリア講話の講師を学校運営協議会が斡旋する等、地域課題に応じた教育実践が可能となっている。

学校現場の評価・感想・コメント

令和元年１２月実施の学校評価アンケート（肯定：4～否定：1）の「ふるさとキャリア教育野付学を通して、故郷を大切にする気持ちが育っている」では、子ども３．５９（7月：３．５５）、保護者３．６１（7月：３．３９）、教職員３．８２（7月：３．９１）と高い数値を示している。そのため、毎年朝５：５０に漁港に集合して行う「チカ採卵実習」等に対して、子ども、保護者、教職員の誰からも負担感を訴える声は出ていない。地域・保護者からは「ふるさとキャリア教育」の実践に対して学校に感謝する言葉が多く聞かれ、教育活動への協力を惜しまない地域に対して教職員は有難く感じている。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

学校運営協議会においては、高年齢の委員は、子ども達が素直でたくましく成長していることに安堵し、地域の良さを理解して誇りに感じている現状が嬉しいと話していた。若い委員からは、これからの時代を見据えてグローバルな視点で故郷を見つめ直す視点と、AI 時代の一次産業の在り方について柔軟に考え、見通しを持つことが出来るような資質・能力を身につけさせて欲しいという要望が出された。

半世紀以上に渡って「当たり前」のように継続されてきた取組が「野付学」として整理され、「見える化」して広く発信することで、外部から高く評価されていることを、子どもたちのみならず、地域の大人たちも喜んでいる。